

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00408

研究課題名（和文）ユダヤ主義とドイツ文学 『自衛 - 独立ユダヤ週刊新聞』とマックス・ブロートを中心に

研究課題名（英文）Judaism and German Literature: "Selbstwehr" and Max Brod

研究代表者

中村 寿 (Nakamura, Hisashi)

秋田大学・教育文化学部・講師

研究者番号：40733308

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：20世紀転換期プラハのドイツ語文学作家のうち、その多くがユダヤ主義からの影響を受けていることはよく知られる。文学に対するその影響を指摘するにあたり、フランツ・カフカの作品以外にはほとんど作品が読まれていないという現状があった。ユダヤのジャーナリズムはドイツ語によるユダヤの民族文学の可能性を模索していた。その過程で注目されたのが、カフカの友人マックス・ブロートの小説『ユダヤ人の女たち』（1911）である。本研究では、この作品のもつ意義を検証した。その過程で報告者はブロートの年譜、作品目録の作成、翻訳を行った。年譜、作品目録、小説の翻訳は2024年度内に出版される予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『自衛』をはじめとするジャーナリズムはドイツ語作家にあてて、ユダヤ民族を象徴するような文芸を要請していた。宗教、民族的少数派の視点からドイツ文学史を観察することは、その記述の深化をうながすことになる。マックス・ブロートの小説は現在では顧みられていない。彼自身カフカの親友、遺稿編集者であったことから、カフカの伝記作者として知られている。『ユダヤ人の女たち』の翻訳は、カフカの日記にも言及があることから、ドイツ文学、カフカ研究だけでなく、一般のドイツ文学愛好家にとっても有意義である。

研究成果の概要（英文）：It is well known that most Prague German writers at turn of the 20th century were influenced by Judaism. Naturally, it is important to clarify the effects on German literature, however, contemporary works are seldom read and discussed except those of Franz Kafka. Jewish journalists of that era were actively exploring the possibility of a Jewish national literature written in German. The novel of Kafka's closest friend, Max Brod "Jewish Women" (Die Juedinnen, 1911) was one of those born in the midst of these discussions about Jewish novels. This research project elucidated the relevance of this novel to the cultural debates of the time. Additionally, a biography of Max Brod and a bibliography of his works, as well as translation of this novel have been completed and will be published at the end of 2024.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ドイツ文学 ジャーナリズム 『自衛 独立ユダヤ週刊新聞』 マックス・ブロート フランツ・カフカ ユダヤ人

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

20世紀転換期のドイツ文学には中東欧出身のユダヤ人作家が多い。例えばブラハ、チェコ出身のドイツ語作家には、フランツ・カフカ(1883~1924)、マックス・プロート(1884~1968)、フランツ・ヴェルフエル(1890~1945)、エルンスト・ヴァイス(1882~1940)ほかがいる。彼らが影響を受けていたユダヤ主義は伝統宗教としてのユダヤ主義ではなく、民族主義としてのユダヤ主義、シオニズムであった。

報告者は雑誌類のなかでもブラハのドイツ語新聞『自衛 独立ユダヤ週刊新聞(Selbstwehr – Unabhängige jüdische Wochenschrift)』(1907~1938)の読解に取り組んできた。『自衛』は、オーストリア=ハンガリー帝国(1867~1918)の存続を前提とし、多民族国家の枠内でのユダヤ人自治の可能性を模索していた。その目標は、ユダヤ人をドイツ人、チェコ人をはじめとする帝国を構成する諸民族と対等な存在にすることだった。

『自衛』はユダヤ民族の同一性を再定義するにあたり、ユダヤ人の言語、芸術に注目した。文化への関心から、ドイツ語によるユダヤの民族文学の創造可能性が模索される。カフカ、プロートは『自衛』を通じて、ユダヤ民族を象徴するような文学の創作を、作家の義務として引き受けるようになった。

シオニズムが文学に関心を寄せていたことは明らかになっていた。いっぽうで、その影響のもとに発表された文学作品については、カフカ以外にはその詳細がほとんど明らかにされていない。本研究は、一次大戦期のユダヤ系のジャーナリズム、プロートの評伝、彼の小説『ユダヤ人の女たち(Die Jüdinnen)』(1911)等を読解の対象として、文学に対するユダヤ人のナショナリズムの影響を明らかにしようとする試みである。

2. 研究の目的

中東欧のユダヤ系ドイツ文学はドイツの国民文学史にとって傍系のあつかいである。ドイツ文学史がカフカの背景にチェコ、ユダヤのナショナリズムの背景を重視していないのに対して、本研究では、カフカ、プロートそのほかのドイツ語作家をつなぐ背景に、ユダヤ系の新聞雑誌という結節点を設定した。

本研究の目的は、作家個人に対するシオニズムの影響を明らかにすることを通じて、ユダヤの同一性をめぐって展開された作家間のコミュニケーションの実践を記述し、作品に残されたその痕跡を明らかにすることである。

3. 研究の方法

(1) ユダヤ系新聞雑誌の読解

使用した『自衛』はマイクロフィルムである。フィルムビューワを用いてデジタルデータ化、プリントアウトして読解を進めた。海外図書館に依り、個人ホームページを開設、『自衛』のデータベースを開設することも考えていたが、実現できなかった。

(2) プロートの年譜、著作目録の作成

プロートは小説家であり、その活動期間は1900年代から60年代におよんでいる。それにもかかわらず、プロートの位置づけはカフカの友人、遺稿編集者というものであり、著作翻訳はカフカの評伝しか存在していない。また、その生涯についてもほとんど記述されていないのが現状である。報告者は主に二つの自伝『生をめぐる闘い(Streitbares Leben)』(1960)、『ブラハ・サークル(Der Prager Kreis)』(1966)をもとに、プロートの年譜を作成した。

同様に、その著作を網羅する目録も存在していない。目録の作成にあたって海外図書館での文献調査も検討したが、国際情勢の悪化、所属機関の校務等で海外出張は控えた。報告者は国内の大学図書館所蔵の文献にもとづき、著作リストを作成した。

(3) 小説『ユダヤ人の女たち』の翻訳

フィルムの読解のほか、小説の翻訳を進めた。翻訳は採択期間内に完成した。2024年6月現在、訳稿および訳書に掲載予定の論文の校正作業を進めている。

4. 研究成果

(1) ユダヤ系新聞雑誌の読解

フィルムと適宜、海外のデジタルアーカイブで公開されている定期刊行物を中心に読解をした。『自衛』では、1907年の創刊から一次大戦開戦直後の発行中断にいたるまで、継続的に「文芸(Feuilleton)」欄が設けられている。本研究では「文芸」欄に注目した。

「文芸」欄には、イディッシュ文学のドイツ語翻訳が数多く掲載されていた。それらの読解の結果、シオニズムはイディッシュ文学に比肩しうるドイツ語によるユダヤの民族文学の創造を呼びかけていたことが指摘できた。

1911年3月、シオニズムの論客フーゴ・ヘルマン(1887~1940)は「文芸」欄に『ユダヤ人の女たち』書評を発表した。そこでヘルマンはヤーコブ・ヴァッサーマン(1873~1934)の小説『ツィルンドルフのユダヤ人(Die Juden von Zirndorf)』(1897)を例に、「ユダヤ人の小説」の必要性を主張した。ヘルマンによると、『ユダヤ人の女たち』は、ドイツ系ユダヤ人の社交界を描写しているだけで、問題提起がなされていない。カフカの日記ほかを参照すると、一次大戦以前、シオニズムに対するプロートの理解はきわめて表層的であったことが判明した。

(2) プロートの年譜、著作目録の作成

プロートの二つの自伝(上掲)とその他文献をもとに、年譜を作成した。プロートの生涯について指摘できたことは主に以下の3点である。

プロートは『ユダヤ人の女たち』の発表を経てシオニズムに近づき、一次大戦中からその実践活動に積極的に関わるようになった。

プロートはチェコスロヴァキア共和国独立(1918)後、同国のユダヤ人評議会幹部の一員としてユダヤ人の権利擁護のための活動を実践した。

プロートはパレスチナ移住(1939)後も晩年までドイツ語での小説、評論等の執筆を続けた。著作のジャンルは文学(小説および韻文)、評論(思想およびユダヤ主義)、戯曲、翻訳(チェコ語からドイツ語)の四領域におよそ分類された。文学は四十作以上、チェコ語による歌劇台本のドイツ語訳にも注目すべきである。プロートにはヤナーチェクの紹介者としての功績もあった。

(3) 小説『ユダヤ人の女たち』の翻訳

小説の舞台は同時代のプラハとテプリッツである。登場人物はそのほとんどが市民階級に属する裕福なユダヤ人であり、プラハに生活の基盤を置いている。彼らは避暑のためにおよそ一ヶ月程度テプリッツに滞在する。小説は避暑地での出会いと別れをあつめている。

主人公は十七歳の青年フーゴ・ローゼンタール、プラハにある実科ギムナジウムで学ぶ発明家志望の生徒である。小説では実験器具等への言及を通じて、科学技術の発展に対する彼の興味が示される。彼は物理学の期末試験に落第し、休暇後に再試を受験しなければならない。

主人公はイレーネ・ポッパーという十歳ほど年上の女性に惹かれていく。彼女はかつて婚約をしていたが、持参金をめぐる条件が折り合わず、婚約を破棄されていた。主人公とイレーネは定期的な面会、テニス、ボウリング、ダンス等の社交を通じて関係を深めていくが、恋人同士の関係にはいたらない。

注目すべき場面は、登場人物の一人ヌスバウムが企画するタウンミーティングの場面である。ミーティングに主人公はイレーネの弟アルフレートとともに参加した。弟はドイツ民族主義者のユダヤ人であって、弟にとってユダヤの同一性は大きな意味をもたない。ミーティングでの弟との会話を通じて、主人公は弟の竹を割ったような性格に惹かれるものの、違和感を抱いた。ユダヤ人の同一性をもつ意味は、弟に対する違和感を通じて表明される。主人公は弟に「最も大事なニュアンス」、「典雅かつ同時にユダヤのものであったはずのなにか」が欠けていることに気づく。

主人公を著者のプロートと同一化してみると、ユダヤ民族主義に対するプロートの理解の限界が指摘できる。

シオニズムの背景にはドイツ人とチェコ人による民族対立があった。二十世紀転換期のボヘミアでは、ユダヤ人の過半数以上がチェコ語を話し、チェコ人として振る舞っていた。いっぽうで、プラハのユダヤ人は自身を支配層のドイツ、オーストリア人に同一化していた。ユダヤ人は分断された状態にあったため、チェコ人にとってユダヤ人は支配者ドイツ人の前衛、その手先に見えてしまっていた。シオニズムはユダヤ人をドイツ人、チェコ人と対等な存在にすることで、反ユダヤ主義を克服しようとしていた。

『ユダヤ人の女たち』発表当時のプロートは、ユダヤ人のドイツ、オーストリア文化への同化、埋没を疑問視していなかった。シオニズムはユダヤ民族の未来像として、オーストリアの生活様式とは異なるものを期待していたのだが、小説はビーダーマイヤー様式のサロンの雰囲気を描き写していただけだった。

そのほか、現代のジェンダーにつながる問題も提起されていた。ユダヤ人の女子教育は主婦になることしか想定されていない。彼女たちの自立は教育によって阻まれている。主人公はイレーネのこの指摘が理解できない。主人公をプロートに同一化してみると、彼はジェンダーに対しても、シオニズムと同様の態度を示していたことが分かった。プロートは男女間の不平等を描写しているだけで、その背後にある家父長制を問題視しようとはしない。女性の自立をめぐる議論においても、プロートは問題を叙述しているだけで、その解決を試みようとはしていなかった。

翻訳の過程でイディッシュ語の罵倒表現がいくつか見つかった。プラハ、テプリッツの描写は現実の模写であった。小説で言及される地名、建造物等の特定を進めると、描写されていた保養施設、公園等は、ほぼ例外なく現代まで存続していることが確認できた。

翻訳は2024年度内に幻戯書房より出版される予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中村 寿	4. 巻 77
2. 論文標題 彼の脳裡にほのかにかつ心地よい音をたてて漂うもの マックス・プロートの小説『ユダヤ人の女たち』（1911）における「ニュアンス」について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学	6. 最初と最後の頁 59-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 中村 寿
2. 発表標題 ユダヤ主義とドイツ文学～『自衛 独立ユダヤ週刊新聞』を中心に
3. 学会等名 基盤B「中東欧・ロシアにおける反ユダヤ主義・ユダヤ人迫害の比較研究」研究会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村 寿
2. 発表標題 「民族の小説」をめぐる議論の諸相～マックス・プロートの小説『ユダヤ人の女たち』（1911）について
3. 学会等名 日本オーストリア文学会秋季例会（招待講演）
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 中村 寿	4. 発行年 2021年
2. 出版社 秋田魁新報	5. 総ページ数 1
3. 書名 旅と移動・世界×文化（13）ウィーンにみる多様性と統一	

1. 著者名 中村 寿	4. 発行年 2022年
2. 出版社 秋田魁新報	5. 総ページ数 1
3. 書名 集う人々・世界×文化(4) ドイツ文学に描かれたウクライナ	

1. 著者名 中村 寿	4. 発行年 2023年
2. 出版社 秋田魁新報	5. 総ページ数 1
3. 書名 平和考・世界×文化(1) アンネ・フランクが記した愛と夢	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------